

## 産学官連携事業「現場で話して、感じて、学び取る！リアル薬剤師」が高校生の薬剤師イメージに与える効果

城西大学薬学部

○堀井徳光、木村聡一郎、野村陽恵、小玉菜央、高橋直仁  
三ヶ田潤哉、大嶋繁、井上裕、岡崎真理

### 1 目的

病院薬剤師の適正な人数を維持することは、高度な医療を継続的に提供するうえで重要である。厚生労働省は、全国的に病院薬剤師の適正数確保に向けた取り組みの強化を進めている。城西大学薬学部では、薬学および薬剤師に関心を持つ高校生を対象とした新規職業体験事業「現場で話して、感じて、学び取る！リアル薬剤師（以下、リアル薬剤師）」を企画した。本事業の実施にあたり、埼玉県薬剤師会および埼玉県病院薬剤師会の後援を得るとともに、埼玉県が推進する薬剤師確保施策の一環として、埼玉県との共催により実施した。本事業の目的は、高校生が病院で働く薬剤師と直接交流し、業務内容や医療現場での役割、社会的意義について考え、体験を通じて理解を深める機会を提供することである。本発表では、「リアル薬剤師」参加後に実施したフィードバックアンケートの結果から、本事業の有効性および今後の改善点について検討するとともに、さらに事業参加前後における高校生の薬剤師に対するイメージの変化について報告する。なお、第4回目は2026年2月7日実施予定であるため、本稿では第3回までの集計結果をまとめ、今後の課題について考察した。

### 2 事業実施内容

#### (1) 実施医療機関

埼玉医科大学病院（第1回：2025年7月12日）、自治医科大学さいたま医療センター（第2回：2025年8月9日）、および、日本赤十字社深谷赤十字病院（第3回：2025年10月25日）の協力を得て実施した（第4回は、獨協医科大学埼玉医療センターにて開催予定）。

#### (2) 参加者

埼玉県内の高等学校に在籍する生徒および埼玉県在住の高校生を対象に、各回15名を定員として募集した。しかし、応募者多数であったため、参加枠の上限を20名に拡大し、さらに第1回および第2回では午前・午後の1日2回開催とした。

#### (3) 実施概要

本事業は約3時間で構成し、4つのコンテンツを実施した。まず、KJ法を用いたスモールグループディスカッションを行い、高校生が抱く「薬剤師」および「薬剤師の仕事」のイメージを参加者間で共有した。次に、院内見学・調剤体験として、模擬処方箋による計数・計量調剤体験、無菌調製や抗がん剤混合の見学、インスリン使用時の注意事項説明など、対物業務に関わる内容を体験した。その後、院内チーム医療への参画や模擬服薬指導、外来薬剤師業務紹介など、対人業務の役割について紹介を受けた。最後に、自由討議形式で高校生から薬剤師へインタビューを行った。なお、見学・体験および業務紹介の詳細については医療機関ごとに適宜調整を行った。

#### (4) 倫理的配慮

本研究は、城西大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」の承認を得て実施した（人医倫-2024-08）。なお、全著者において本発表に関連する利益相反はない。

### 3 調査項目

本イベント参加後、フィードバック調査を実施した。調査項目は、薬剤師の仕事内容や日常に関する職業理解度、イベント参加前後における薬剤師イメージの変化、進路決定への有用性、全体的な満足度（各5段階評価）、および他者への推奨度（11段階評価）とした。さらに、薬剤師イメージの変化については、心理学領域で広く用いられている Semantic Differential 法（SD法）により評価し、28対語（例：活動的な～消極的な、自由な～拘束された等）を設定した。なお、回答はすべてスマートフォンを用いて取得した。

### 4 結果および考察

応募者数は延べ144名（男性25名、女性119名）であり、抽選により参加した高校生は合計で82名（男性15名、女性67名）、年齢内訳は15歳27名、16歳28名、17歳22名、18歳4名であった。また、同伴した保護者は40名であった。イベント参加後の職業理解度については、「薬剤師になるために必要な学び」を除く全項目で、95%以上が理解「できた」または「ややできた」と回答した。特に「薬剤師の仕事内容」については全員が高い理解度を示した。これらの結果から、医療現場での実体験が、高校生に対して薬剤師業務に関する明確かつ具体的な理解を促進したことが示唆された。薬剤師イメージは93.8%が「良くなった」または「やや良くなった」と回答し、進路選択への有用性についても96.9%が肯定的に評価した。また、イベントに対する満足度は4.73（5段階）と高値であったものの、他者への推奨度は7.66（11段階）とやや低値であった。

本イベントに関する情報取得経路（複数回答可）は、高校教員（進路指導担当や担任等）からの勧めが25件、保護者からの勧めが24件であり、他の情報源と比較して周囲からの勧奨による参加が多かった。このことから、情報収集の過程においては、SNS等を通じて高校生自身が能動的に行うケースよりも、進路決定に影響を及ぼす周囲の大人の関与が大きいことが示唆された。

SD法によるイメージ評価では、体験後「活動的な」+1.47、「目立つ」+1.29、「新しい」+1.27、「主体的な」+1.21といった肯定的なイメージ変化が見られた。また、「対人的な」+0.37、「広い」+0.99、「感情的な」+0.18のシフトが見られ、参加者が抱く薬剤師像が「静的にモノを扱う職種」から「患者と積極的に関わる専門職」へと変化したことが示唆された。また、「真面目」「安定」「必要」といった薬剤師の基本的信頼性に関わる項目はほぼ変化がなく、高い評価が維持された。

### 5 総括

本稿では、産学官協働による薬剤師職業体験事業「リアル薬剤師」を実施し、その効果をアンケート調査に基づいて評価した。その結果、「リアル薬剤師」への参加により高校生の職業理解が深まり、薬剤師のイメージは肯定的に変化し、進路選択への有用性も高く評価された。また、イベント満足度も高かったことから、本事業は薬剤師志望ならびに薬学部進学希望の動機付けに寄与する可能性が示された。一方で、他者への推奨意向は限定的であった。今後は、薬剤師の日常業務や職業上の困難をより具体的に伝える体験要素の追加等を検討し、より魅力的なイベントへブラッシュアップしていきたいと考えている。

### 6 謝辞

本事業の実施にあたり、広報活動に全面的にご協力いただきました埼玉県薬務課の皆様、ならびに高校生に貴重な学びの場をご提供いただきました埼玉医科大学病院薬剤部、自治医科大学附属さいたま医療センター薬剤部、日本赤十字社深谷赤十字病院薬剤部、および獨協医科大学埼玉医療センター薬剤部の先生方に、心より御礼申し上げます。

## 管内の大学生を対象とした食育推進事業について

埼玉県草加保健所

○穂積美彩 川崎麻里奈 渡邊結実 岡田あやか  
和久井幸枝 山川律子 佐藤夕子 得津馨

## 1 はじめに

第8次埼玉県地域保健医療計画（第5次埼玉県食育推進計画）では、主食・主菜・副菜を組み合わせた食事を1日2回以上ほぼ毎日食べている者の割合が低いこと、食塩摂取量が多いこと、野菜摂取量が少ないこと、朝食を欠食する20～30歳代が多いこと、20～30歳代女性のやせの者が多いこと等が課題として挙げられている。

また、プレコンセプションケア（以下プレコンとする）の視点からも将来的な健康リスクの発生を予防し、将来の選択肢を広げるために、性別を問わず若い世代を中心とした食育、健康的な生活習慣の確立の推進は重要である。

そこで、若年層が健康に関する課題について正しい知識を身に付け、自身の問題として捉え、考える機会となること、ひいては上記計画における課題改善を目的として、管内の大学生を対象とした事業を展開したので報告する。

## 2 実施内容

	時期	場所	テーマ	内容	評価の方法
1	令和6年度	大学女子寮（食事無）	・若年女性の健康課題に関する情報提供	・指導資材等を活用した食育に関する情報提供（管理栄養士） ・プレコンに関する講話（保健師） ・グループワーク ・調理実習	・アンケート（実施直後、3か月後）
2	令和7年度 夏期	大学内イベント会場	・若年層の健康課題に関する情報提供	・チラシ配布（管理栄養士・保健師で作成）	・チラシ配布枚数
3	冬期		・野菜摂取の啓発 ・大学生の食や健康に関する意識調査	・チラシ配布（管理栄養士・保健師で作成） ・1日に必要な野菜量を可視化できる体験 ・来場者へアンケート	・チラシ配布枚数 ・アンケート

## 3 実施結果

令和6年度の参加者は1・2年生で、自身で食事の準備を行うこともあり、主食・主菜・副菜を揃えて摂取することが容易でない状況であったが、3か月後のアンケートでは、バランスよく食べる習慣が大きく改善され、食習慣の意識変容についても継続して実施できている。

今回は寮生全員に向けて健康情報に関するコラムを載せた開催案内を周知したものの、調理実習を含む事業であったため参加者が限定的になり、広く普及啓発するには至らなかった。

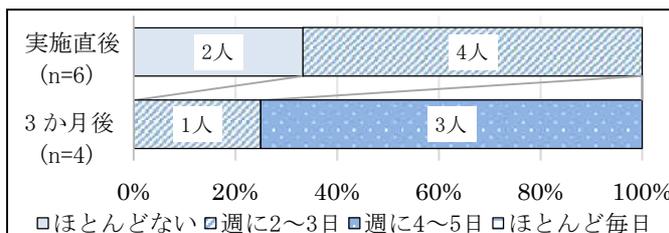


図1<主食・主菜・副菜を3つ揃えて食べるのが1日に2回以上あるのは、週に何日あるか>

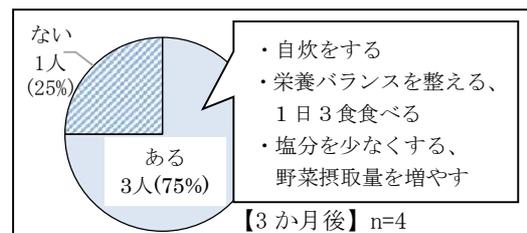


図2<事業への参加後、新たに気を付け始めたことはあるか>

令和7年度はより多くの学生を対象に周知啓発を行いたいと考え、大学内イベントにてチラシを夏期150部、冬期109部配布した。また、冬期には「目指せ！野菜350gチャレンジ」と称し、1日に必要な野菜量を可視化できるイベントを行い、37名が参加した。

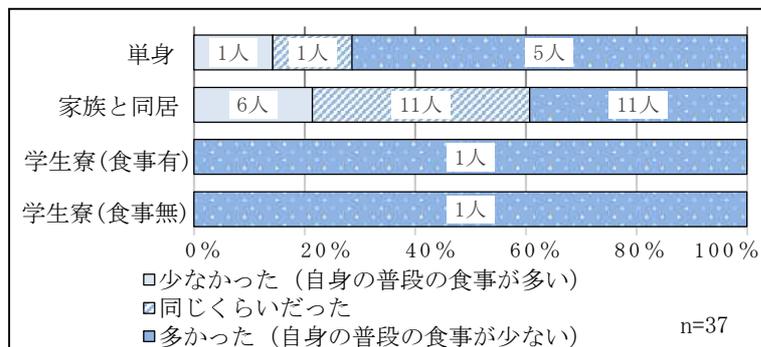


図3<野菜350gは、普段の食事と比べてどうか>

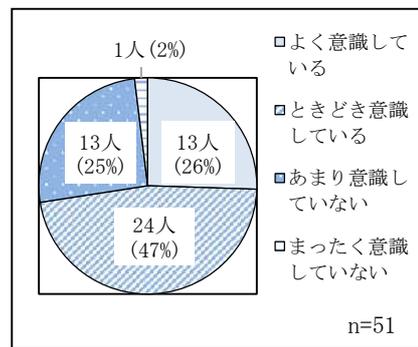


図4<主食、主菜、副菜を揃えて食べる事を意識しているか>

アンケートの結果より、同居者の有無にかかわらず、野菜摂取量が不足している割合が多いことが明らかになった。

また、主食、主菜、副菜を揃えて食べる事を意識している学生は7割を超える結果となった。

プレコンについては約9割が聞いたことはないと回答した。

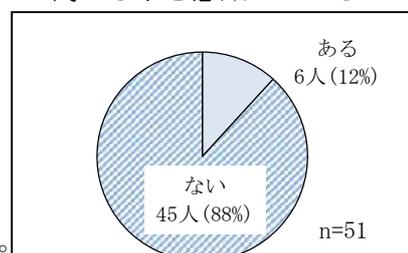


図5<プレコンという言葉聞いたことはあるか>

#### 4 考察

本事業は学生が自分の健康について考えることも目的の一つとしていた。令和6年度のアンケートでは振り返るきっかけになったという感想もあり、狙い通りの事業となった。更に3か月後のアンケートでは、食事バランスや自炊を継続的に意識しているとの意見もあり、単なる一時的な変化にとどまらず、食事バランスを考えた食習慣が定着しつつあることが確認でき、知識が行動変容につながることを示された。

しかしながら、令和7年度の事業を進める中で、野菜摂取目標量の認知度の低さや、学生自身の健康課題に対する認識不足、学業やアルバイトの多忙、経済的余裕がない等の課題も明らかになった。この背景には、正しい情報の取捨選択能力の不足や、健康に対する優先順位の低さが影響している可能性がある。健康意識の向上には情報提供の継続が不可欠であると考えられる。

また、プレコンについては令和6年12月にこども家庭庁が大学生向けに実施した意識調査で回答者50名全員が「聞いたことはない」と答えている。本事業のアンケート結果でもプレコンの認知度が低いことが明らかであり、若年層への効果的な普及啓発を検討していく必要がある。

#### 5 効果的な事業展開に向けて

大学生に対して健康づくりに関する意識づけを行うことは、今だけでなく、将来、そして次世代の健康にもつながる大切な取り組みである。そのためには、管理栄養士や保健師など多職種が連携すること、食事を含めた生活習慣全体の見直しを支援すること、正しい情報を継続的に提供していくことが重要であり、前述の計画における課題改善にもつながると考える。

大学の担当者も保健所との連携を前向きに捉えており、今後も学生が自分自身の問題として考えられる内容を検討し、継続して取り組んでいきたい。

## 高校生と考える若者のメンタルヘルス ～10月10日世界メンタルヘルスデーの取組～

川口市保健所疾病対策課精神保健係

○渋谷 彩夏 増本 栄二 清野 茜 佐野 美貴 内田 幸紀 西尾 悦子

### 1 目的・経緯

世界メンタルヘルスデーは、世界精神保健連盟が、メンタルヘルス問題に関する世間の意識を高め、偏見をなくし、正しい知識を普及することを目的として定めた国際デーである。川口市では、令和6年度から市民のメンタルヘルスリテラシーの向上を目的として、世界メンタルヘルスデーに合わせ、より広く市民に対する普及啓発の取組を開始した。

川口市では、平成30年度の保健所開所以降、個別支援や緊急対応の中で、多くの方が若年の頃からメンタルヘルスの課題を抱えていたことが明らかとなり、令和4年度に若年層（15～35歳）のメンタルヘルスに関する相談窓口「こころサポートステーション SODA かわぐち」を設置した。利用者数は年々増加しており（表1）、その内、10代の利用者は、毎年4割を超えている状況であった。一方で、相談窓口にたどり着かない若年層に対しての周知やメンタルヘルスに関する正しい情報を提供する方法については課題となっていた。そこで、令和7年度は、世界メンタルヘルスデーに合わせ、高校生をターゲットとした普及啓発を実施した。

### 2 実施内容

#### (1) 市立高校美術部員へのアプローチ

川口市では、既に他部署から市立高校美術部にSDGsのシンボルマーク等のデザイン製作が依頼されており、令和6年度は、保健所から、メンタルヘルスをイメージしたクリアフォルダーのデザインを依頼した（図1-①）。さらに、今年度は、高校生をターゲットに、より効果的な普及啓発の具体的な方策を担当者間で検討した。しかし、高校生が「メンタルヘルス」に対してどのようなイメージを抱いているのか、どのようにすれば関心を持ってもらえるのか等について情報が少なく、議論は滞った。そこで、美術部員に直接取組の目的や依頼内容を説明し、さらに、メンタルヘルスについて短時間の講座を実施しながら、メンタルヘルスに関するイメージや疑問を聞くことにした。また、グループワークを実施し、普及啓発のグッズに関して自由にアイデアを出してもらった。その後、保健所担当で再度検討し、美術部員から募ったデザインを印刷したクリアフォルダーを作製した。デザインは複数提出してもらい、その内の1案（図1-②）を採用した。他のデザインについても、デザインした美術部員からのコメントを添えて市役所ロビーにて展示した。

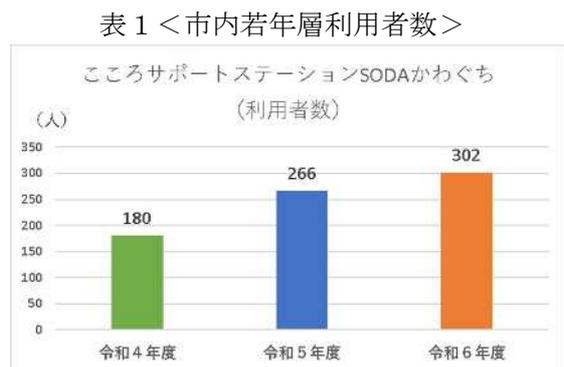


図1 - ①



図1 - ②

<①令和6年度デザイン ②令和7年度デザイン>



## (2) 学校への説明と普及啓発グッズの配布

クリアフォルダーと普及啓発に関するチラシ等の配布先は、市内の高校（7校）に通う、受験や就職等大きく周囲の環境が変化すると想定される高校3年生及び定時制高校4年生（約2,500人）とした。配布対象者を限定したことで、普及啓発のターゲット層へ確実に情報を届けることができたと考えている。なお、配布の際は、各校の校長と養護教諭に、今年度の取組の内容や目的を直接説明し、校内のメンタルヘルスに関する相談の実情等も伺うことができた。

## 3 実施結果

「2 実施内容」で示した取組（以下、「本取組」と示す）により、主に2点の結果を得ることができた。

1点目は若年層のメンタルヘルスに関するイメージや、若年層の間で、どのようにメンタルヘルスという言葉が使われているのかを把握できた点である。美術部員と話した際に、メンタルヘルスという言葉のイメージは、「なんかマイナスな感じ。」「メンタルヘルス、って心の健康のことなのか。」「『私メンタルだから。』とか『メンヘラ』という表現をよく見かけるので、メンタルヘルスという言葉自体が不調な状態も含んでいるイメージ。」という意見が聞かれた。これらの情報は今後若年層へのメンタルヘルスに関する取組や個別の相談支援にも反映することができると思う。

2点目は、高校の校長や養護教諭に、メンタルヘルスに関する普及啓発の重要性について直接説明し、理解を得ることができたという点である。また実際に教職員と話をすることで、高校でのメンタルヘルスに関する取組を知ることができ、今後の普及啓発等の協力体制について相談することもできた。実際に、この後、配布先の高校の内1校から、1、2年生に対してメンタルヘルスに関する講座の依頼があった。保健と教育の連携は、課題となっている点もあるが、今後は、高校生を対象としたメンタルヘルスに関する取組について、相互に円滑な協力関係の構築が可能と考えられる。

## 4 評価・効果的な事業展開に向けて

普及啓発の効果は、短期的な立証が困難な場合もあり、本取組に関し、現時点での明確な効果は把握できていない。しかし、近年精神疾患を抱える患者数は増加傾向にあり、国は自治体に対し、予防の観点を持った相談支援体制の構築や普及啓発の重要性を提示している。また、障害の有無や程度に関わらず、誰もが安心して地域で生活できるよう、昨今多くの自治体を取り組んでいる「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」（以降、「にも包括」と示す）の構築においても、住民が精神疾患、精神障害について理解し、差別、偏見を解消していくことは不可欠とされており、住民に対する普及啓発に取り組むことは自治体の重要な役割である。

本取組を通じ、地域課題を解決するためには、行政だけではなく、住民と共に考えることが重要だと実感した。今回は行政主体の取組であったが、高校生にメンタルヘルスに関する取組の必要性を理解してもらい、高校生の意見を踏まえたグッズを作製することができたことで、保健所としても自信を持って普及啓発を実施することができた。若年層へのアプローチには、若者のことを若者から教えてもらうことが必要とも考えられ、本取組に高校生が関わったことで、同級生や保護者にも訴求することができたと思う。また、学校と保健所が顔の見える関係となり、保健と教育の連携がより円滑になることが期待される。今後も、にも包括の構築を目指して、今年度の取組のように、他の市内の高校とも協力しながら、普及啓発を展開したい。

## 新任期保健師による保健師学生実習オリエンテーションの効果と課題

埼玉県草加保健所

○青木萌莉 松本海瑚 岡崎雪 二瓶琳雅

和久井幸枝 山川律子 金井美奈子 佐藤夕子 得津馨

### 1 目的

当所の保健師配置は、入庁3年目までの技師級が半数を占め、経験年数が二極化していることが特徴である。(図1, 2)

このため、新任期保健師の人材育成を中心的に担う中堅期保健師のマンパワーが恒常的に不足していることから、新任期保健師が積極的に業務理解を深め、自らの経験につなげていくことが求められている。その一環として、新任期保健師は担当内の業務全体を学生に説明する機会である「保健師学生実習オリエンテーション」を担っている。

今回、実習後のアンケートやオリエンテーション担当者(以下、担当者とする。)の振り返りにより、本オリエンテーションの効果や課題を考察したため報告する。

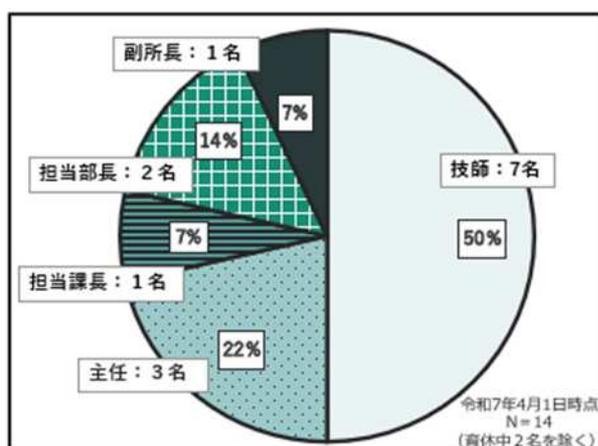


図1：当所保健師の職位

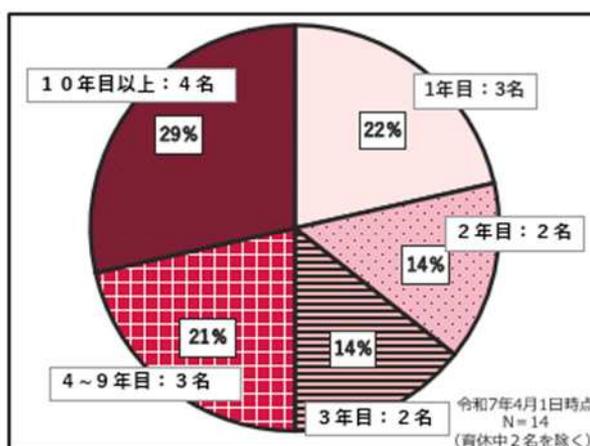


図2：当所保健師の入庁後の経験年数

### 2 実施内容

表1：オリエンテーション実施内容

目的	学生：担当者へ気軽に質問でき、実習の学びを深める 担当者：対象者に合わせた説明をし、自身の経験や学びにつなげる
対象者	大学・専門学校4校の保健師課程専攻学生 6グループ、17名
担当者	新任期保健師(入庁2・3年目)4名
実施時期	令和7年5月から同年9月
内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>オリエンテーション 実習初日の半日で担当者が原則2名1組で以下を実施 <ol style="list-style-type: none"> <li>①PowerPoint資料を用いてプレゼンテーション(90分) ※年度途中からDX化し、音声付き動画資料で実施</li> <li>②所内案内、物品紹介(30分)</li> <li>③個別記録を活用した事例紹介、各業務で使用する帳票類等の紹介(60分)</li> </ol> </li> <li>実習終了日にアンケートを実施</li> <li>6グループ全て終了してから、担当者で集まり振り返りを実施</li> </ol>

### 3 アンケート結果及び担当者振り返り

実習後のアンケートで、学生に「本オリエンテーションが役立ったか」を点数で評価してもらったところ、10点中平均9.56点で、6点以下の学生はみられなかった。また、実習前後で「保健所保健師になりたいと思うか」という質問に対しては、10点中平均4.1点から7.4点へ3.3点の上昇がみられた。

また、アンケート自由記載・担当者振り返りからは以下の結果が得られた。(表2)

表2：アンケート自由記載回答・担当者振り返り

学生	<ul style="list-style-type: none"><li>・疑問点をその場で解決してもらったので分かりやすかった</li><li>・「こんなこと聞いてもいいのかな」と思うことでも聞けて、より学びが深まった</li><li>・新人ならではの話を聞き、役割をイメージしながら実習を受けることができた</li></ul>
担当者	<ul style="list-style-type: none"><li>・担当業務を振り返り、事業目的の再確認や評価ができた</li><li>・他担当業務の事業や対応内容等を学びジョブローテーションを意識できた</li><li>・学生が理解しやすい説明を意識することで普段の対応にも活かすことができた</li></ul>

### 4 考察

アンケート結果及び担当者による振り返りから、本オリエンテーションは学生と担当者の双方に対して実践的な知識習得と業務理解の促進に効果的であったと考えられる。また学生の不安軽減や担当者の指導体制強化等に寄与し、双方の成長を支えたと評価できる。(表3)

表3：考察

学生	<ul style="list-style-type: none"><li>①新任期保健師が実施していることで「保健所保健師」を身近に感じる → <b>気軽に質問しやすく、実習の学びを深める</b></li><li>②世代が近い保健師が感じるやりがいを知り、「保健所保健師になりたい」と思う → <b>進路選択に役立つ</b></li></ul>
担当者	<ul style="list-style-type: none"><li>①担当業務の振り返り、互いの業務について学ぶ機会となる → <b>ジョブローテーションを意識するなど保健所保健師業務の意欲向上につながる</b></li><li>②対象に合った内容を担当内で考案 → <b>プレゼンテーション能力向上や人材育成につながる</b></li></ul>

### 5 今後に向けての課題

今回の取組を通じて、以下2点の課題が明らかになった。

1点目は、今年度途中からDX化により音声付き動画資料を導入し、担当者の経験による偏りがなく均一化が図られた反面、補足説明や随時の質疑応答が難しく、学生の反応や理解度を確認しながら進めることが困難な点である。そのため質疑応答の時間を十分確保する等、コミュニケーションを促進するための工夫が求められる。

2点目は、人材育成の仕組みをより充実することである。今年度は2～3年目の保健師4名が担当しているが、緊急対応等で不在が出ると、実施回数や経験に偏りが生じやすい。そこで、担当者に1年目の保健師を加えることで経験の偏りを改善し、1年目保健師の業務理解を深めることで次年度への円滑な移行が期待できる。また、3年目保健師がリーダーを務めることにより、育成意識の向上や体制強化につながると考えられる。

これらの課題をふまえ、次年度以降も新任期保健師同士が学び合いながら、本オリエンテーションを実施していきたい。